様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月　７日現在

機関番号：13901
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2009～2010
課題番号：21730137
研究課題名（和文）
朝鮮における近代的な国際関係論の形成
研究課題名（英文）
Formation of Modern Understanding on International Relations in Korea
研究代表者：
姜　東局（KANG Dongkook）
名古屋大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：80402387

研究成果の概要（和文）：

本研究では、第一に、19 世紀の朝鮮のめぐる国際関係の知識・情報のネットワークの存在と歴史を明確する作業を行った。朝鮮をめぐるグローバル、東アジア地域、朝鮮国内の知識・情報のネットワークのダイナミズムを追跡することで、さらなる研究の基礎を提供した。第二に、これまで注目されてきた近代的な国際関係論とは異なる系譜の言説の存在を明らかにする作業が行われた。近代を目標としながらも、その移行の過程では伝統の役割を重視する国際関係論が閔泳翊の思想の中に存在したことを明らかにする作業を通じて、朝鮮の国際関係論の理解に新しい可能性を提示した。

研究成果の概要（英文）：

Firstly, I clarified the existence and change of network of knowledge and information on western international relations surrounding 19th century's Korea. By the research on the dynamism of global, regional, national networks of knowledge and information, I provided the base of further research on the understanding on international relations in 19th century's Korea. Secondly, I found a new type of modernized understanding on international relations in Korea. MIN Yong-Ik asserted that the westernization of Korean international relations was desirable, and Korea strengthened the diplomatic relations with China, simultaneously. His ambivalent view on western international relations can be the starting point for revising the understanding on thoughts on international relations in 19th century's Korea.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：アジア政治思想史
科研費の分科・細目：政治学・国際関係論
キーワード：朝鮮、帝国主義、閔泳翊、伝統と近代、国際関係認識

１．研究開始当初の背景

東アジアにおける西洋の法律・政治関連の知識・情報の交流に関する研究は、近年盛んに行われている。研究の蓄積によって、近代における日・中・韓、三ヶ国間の知識・情報の交流の全体像を描くことが期待される段階に入りつつあるとも思われる。たとえば、「西洋の衝撃」以降に、中国が東アジアにおける知識・情報の集積・変換・発信の中心に

なって、『海国図志』や『万国公法』などの書籍を編纂・翻訳し、日本と朝鮮に伝えた過程については、十分は研究がなされてきた（『東アジア近代史』第二号・第三号の諸論文；李光麟「『海国図志』朝鮮伝来とその影響」『韓国開化史研究』、ソウル：一潮閣、1993年）。そして、日清戦争以降において、日本が知識・情報の新たな中心に浮上して、留学生や出版などを通じ、清と朝鮮へ西洋の法律・政治関連知識・情報を伝えたことについても、相当な研究の蓄積が存在する（山室信一『思想課題としてのアジア: 基軸・連鎖・投企』東京：岩波書店、2001年；狭間直樹編『梁啓超 ： 西洋近代思想受容と明治日本 ： 共同研究』、東京 ： みすず書房、1999 年）。しかし、この二つの時期に挟まれた時期ーすなわち、明治維新以降から日清戦争までの時期ーについての研究は、未だ十分に行われているとは言い切れない。本研究では、この時期において、これまで殆んど研究の対象になっていない重要な知識・情報の交流があるとみなして、研究を展開した。

研究代表者は、博士学位請求論文の執筆に当たって、1880年代後半の朝鮮で、西洋の国際法と国際政治の理解の面において以前の時期とは断絶しているような国際関係論ーたとえば、兪吉濬の「両截体制論」ーが急に登場したことに気づいた。しかし、この国際関係論が如何なる過程を経て形成されるに至ったかという点までは明らかにことができなかったし、その結果、この国際関係論の性格の明確な提示もできなかった。本研究は、知識・情報の還流の観点から朝鮮における近代的な国際関係論の形成過程を明確にする作業、及びに、この作業から明らかになるだろう近代的な国際関係論の存在から朝鮮における近代的な国際関係論の形成過程を全体的に読み直す作業の必要性から出発した。

２．研究の目的

本研究の目的は第一に、朝鮮における近代的な国際関係論の形成を東アジアにおける知識・情報のネットワークの働きから再構成すること、第二に、その中で具体的にいかなる近代的国際関係論が形成されたのかを明確にすることにあった。以下、この二点について、詳述する。

「朝鮮における近代的な国際関係論の形成を東アジアにおける知識・情報のネットワークの働きから再構成する作業」は、まず、「集玉齋図書」西洋関連漢籍蔵書が清から朝鮮へ輸入されたルートを明らかにすることから始まる。ルートとしては、従来のルート、すなわち、朝貢使節がつなぐ陸路のルートと新しいルート、すなわち、密使・商人等がつなぐ海路のルートが想定されるが、蔵書の規模の厖大さや上海が中心となっている購入先等を考えると、自然に後者のルートが主な考察対象になると思われる。『上海書荘各種書籍図帖書目』・『行素堂目睹録』等の当時の案内冊子と「集玉齋図書」西洋関連漢籍蔵書の目録、そして、『日省録』・『高宗実録』・個人の文集等の史料を照らし合わせる作業を行うことで、書籍の収集ルートを明らかにする。次に、「集玉齋図書」西洋関連漢籍蔵書の収集の担い手を明らかにする作業が必要である。朝貢使節や密使・商人等の活動を検証するが、もっとも焦点を当ててみたいのは、閔泳翊の役割である。閔泳翊は閔妃の親戚で朝鮮政界の実力者であったが、清の関与政策が強くなりつつあった 1886 年に香港へ亡命した。ただし、亡命期間中にもソウルの腹心を通じて、高宗と密接な関係を維持した。そして、高宗とともに 1880 年代後半における中国の圧政に対抗する外交的努力を展開した人物である。閔泳翊は、1880 年代後半に、中国から大量に本を購入し、ソウルに送ることができる能力と自由を持ったほぼ唯一の人物と思われる。香港亡命期の閔泳翊の活動を追跡することにより、中国と朝鮮の間に存在した知識・情報のルートを探り出すことは、すこぶる期待できると思われた。

次に、「近代的国際関係論が形成されたのかを明確にする作業」は、「朝鮮における近代的な国際関係論の形成を東アジアにおける知識・情報のネットワークの働きから再構成する作業」によって明らかになった知識・情報の還流の結果と朝鮮においてこの作業の担い手の国際関係論の変容を明らかにすることを目指す。とりわけ、閔泳翊の中心的な役割から、彼の国際関係論の変容を明らかにすることが主に目指される。国際関係論の具体像が明確になると、この新しく発見された国際関係論の存在が、朝鮮における近代的な国際関係論の形成に関する既存の理解にいかなる問題を提起するのかを明確にすることで、１９世紀後半の朝鮮における国際関係論の根本的な再構成の必要性を提示することを目指した。

３．研究の方法

本研究は、新しい事実の発見の作業に基づいて、新しい理解の枠組みを提示する手順で行われたので、前半の方法と後半の方法が明確に区別された。

東アジアのネットワークの再構成、及びに、閔泳翊等の国際関係論の変容の実状を探求するために、緻密な、かつ、幅広い文献研究が必要であった。まず、1880 年代の朝貢使節・秘密外交使節等に関する資料を収集し読解した。国内では、国立国会図書館、外務省外交資料館、国立公文書館、東京大学（法学

部附属近代日本法政史料センター、明治新聞雑誌文庫、総合図書館)、京都大学（附属図書館、法学部図書室、人文科学研究所図書室)、及び、法政大学図書館、横浜開港資料館などが中心となった。また、国立国会図書館、東京大学法学部附属機関では、新聞・雑誌も収集した。海外の史料調査は、二つの内容で構成された。まず、知識・情報伝播のルートを確定するために、発信者である中国と受容者である朝鮮半島を中心に資料調査を行った。中国においては第一歴史檪案館および国家図書館などの資料を調べた。韓国における調査の中心になるのは、重要な一次史料を編纂しているソウル大学の奎章閣韓国学研究院であった。また、国史編纂委員会と韓国学中央研究所（旧韓国精神文化研究院）などにも、当時の知識・情報伝播と関わる資料が保管されていたので、調査を行った。

第二に、閔泳翊等の役割、及びに思想のについて、調べるための海外における調査を行った。1880 年代における閔泳翊に関する朝鮮側の資料、とりわけ彼の亡命期に関する資料は貧弱であるため、彼の亡命先の香港で書かれた漢文、そして英語の史料―当時の新聞・雑誌・個人記録等―を収集及び読解する必要があった。そのため、香港中央図書館や香港中文大学図書館等に、資料が豊富に保管され、閲覧可能なかたちで公開されているので、現地調査を実施した。また、閔泳翊の国際関係認識の変容において決定的な重要性を持つ 1884・5 年におけるアメリカ訪問とそれに続いた世界一周にかかわる文献の調査のために、アメリカの国家図書館と国立公文書館、及びに、イギリスの国立公文書館などにおいても、資料調査を行った。おそらく、このテーマについてこれまで行われた資料調査の中でもっとも広範な、且つ、本格的な資料調査であったと思われる。

次に新しい国際関係論の発見やその意義の提示のためには、朝鮮近代史をいかに理解するのかにかかわる理論的問題と向き合う方法論が必要であった。長い間、19 世紀後半の韓国における国際関係認識に対する研究は、その近代的な国際関係に対する理解に焦点を置いてきた 。1990 年代中盤以降は、このような画一性がある程度克服され、多様な研究が出されている 。研究代表者は、歴史の豊かさを理解する可能性を増やすという観点からこの変化を望ましいものと評価しながらも、本研究の問題関心をあえて韓国における近代的な国際関係の理解に置くことにした。ただ、本研究では近代的な国際関係の如何なる側面に理解の焦点を合わせるかという点において、従来の研究とは完全に反対側に立つことにした。韓国の近代的な国際関係に対する理解に焦点を合わせた大体の研究は、如何に近代的な国際関係をモデルとして受け入れたかに関心を払ってきた。そして、この研究の前提になる価値基準は、程度の差はあっても、受け入れるべき対象としての近代への高い評価という面で基本的に共通していた。ところが、地球レベルの皮肉ともいえる現状が当時に実在していた。すなわち、これらの研究が注目した人物が活動した時期は、ホブズボームが「帝国の時代（the Age of Empire)」と名付けた 1875 年－1914 年にほぼ対応している 。この時期に世界の 4 分の１が、西洋の約 6 カ国によって植民地として分配・再分配されたのである。そして、東アジアに位置していた朝鮮は、当時の近代的な国際政治の構造の中で、帝国より植民地にはるかに近い存在であったし、周知の通り結局植民地になっていった。すると少なくとも国際関係の観点からすると、当時の朝鮮において、近代は植民地という災難をもたらした悪いものであるという価値判断がどちらかというと自然なものではなかろうか。そこで、本研究では、伝統と近代の対立をいう二項対立的な研究の枠組みを超えて、朝鮮が置かれている国際関係の位置から当時の国際関係の抑圧的な側面を理解したからこそ、近代的な国際関係に批判的な認識を抱くという思想の起源を探る実証研究をした上で、その結果から伝統と近代が如何なる形で結合したのかを回想的に問う方法をとった。具体から一般を目指すというあまりにも常識的な歴史学の原則に沿った帰納主義的な方法論であるが、「朝鮮における近代的な国際関係論の形成」というテーマについて、このような方法による本格的な作業がほとんどない状況から、この方法論の実行もそれなりの意義があるものであると考えた。

４．研究成果

本研究の成果として、「朝鮮における近代的な国際関係論の形成を東アジアにおける知識・情報のネットワークの働きから再構成する作業」が、研究会の報告を通じて、「如何なる近代的国際関係論が形成されたのかを明確にする作業」が、論文という形で公になった。

前者の成果は、朝鮮における近代的な国際関係論にかかわる知識・情報のルートを、グローバルなネットワーク、東アジア地域のネットワーク、朝鮮国内のネットワークの緊密な連動から考察する作業の中で、朝鮮をめぐる国際関係論に関する知識・情報のネットワークは、グローバルな構成においては、ずっとイギリスを中心とする圏域に属していたこと、東アジアにおいては、朝貢ルートによる中国から輸入に、1860 年代以降からは朝貢以外に近代的なルートによる輸入が活発化されたこと、そして、1880 年代以降は、中央

の若い青年官僚を中心に日本からのルートが開拓されたことを明らかにした。次に国内においては、第一に、中央と地方における近代的な知識・情報へのアクセスの差異、第二に、当時の朝鮮の知識界に存在した「学派」によるイデオロギー的な分立によって、朝鮮に入った知識・情報の拡散や受入に、非常に多様な展開が現れたことを明らかにした。このような発見は、朝鮮における近代的な国際関係論の形成を理解するために重要な基礎作業であろうと思われる。また、この成果は近いうちに論文として執筆し公開する予定である。

次に、「如何なる近代的国際関係論が形成されたのかを明確にする作業」は主に閔泳翊を対象にして、朝鮮における近代の理解に基づいた近代批判的な国際関係認識の起源を探る作業を中心に展開された。研究では、まず、閔泳翊が世界一周の中で、如何なる国際関係にかかわる見聞をしたのかを明確にした。次に、これらの見聞が閔泳翊の国際関係の認識に如何なる変化をもたらしたかを検討した。最後に、この新しい国際関係認識に基づいた外交の構想とその実践の結果を見ることで、閔泳翊の国際関係認識の意義と限界を提示した。

研究の結果を要約すると、閔泳翊は 1884・5 年の世界一周を通じて、ヨーロッパ諸国の帝国主義支配の実状を明確に把握し上で、朝鮮の位置とともに、日本と中国との関係に対する認識を再構成した。その結果、閔泳翊は、朝鮮をエジプトやインドのような暗黒の側にある国家と認識し、この暗黒からの脱出とともに、帝国主義の光による国家の滅亡を避けるという二つの目標を同時に追求するという近代的な国際関係論を提示するに至った。具体的には、同じく暗黒側にいる中国との伝統的な関係を近代的な要素を加味しながら強化することによって、滅亡を避けながら、近代への進むという国際関係論であった。彼は、帰国後、実際この国際関係論に基づいて、親清の政策を取るが、清の帝国主義勢力化と国内勢力の分化によって、この「暗黒の連合」ともいえるこの政策は失敗してしまった。

この研究の意義は、以下のとおりであろう。第一に、閔泳翊研究に対する本稿の意義は、何よりも彼の使行前後の国際関係認識の変遷を外部の要因ではなく、思想の内在的な展開から説明できたことにある。そしてこの知見は、続く時期における閔泳翊の思想と行動を新しく解釈する可能性をも提供すると思われる。次に、韓国の国際関係思想史の観点からした本研究の意義は、伝統と近代の二項対立の観点からの研究を克服し、伝統と近代が複雑に絡み合った現実に対する実証に基づいた成果を提供した点に求められる。近代への熱望が複雑な変遷をたどりながら伝統の肯定につながるという閔泳翊の国際関係に対する思想の展開は、もしかすると彼一人に限られたものではないかもしれない。例えば、兪吉濬の「両截体制」に見えるような国際関係認識、すなわち字小事大の国際関係と近代的な国際関係の各々の理想的な姿を体現しながら共存するという認識は、伝統と近代の相対的な価値評価の点においては、閔泳翊の認識との差はあっても、伝統と近代の共存を前提に、その理想的な関係の姿を探るという発想の構造を共有している。兪吉濬は、韓国初のアメリカ留学生として誰よりも西洋について深く理解していた人物であったため、彼の国際関係認識が閔泳翊と共通点を持っていることは単なる偶然ではないだろう。西洋を深く理解したからこそ、伝統も尊重するようになった閔泳翊や兪吉濬らの思想的立場が一つの明確な系譜として存在したのかは、これからの研究で検証されるべき問題であると思われる。ただ、本研究によって伝統と近代の二項対立を超える思想の系譜の存在の可能性が検証する価値のある仮説として提示されることは、韓国の国際関係思想史の復元において、少なからず意義を持っていると思われる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

①姜東局「暗黒の連合：閔泳翊の国際関係認識における伝統と近代」『名古屋大学法政論集』第240 集、2011 年 6 月（発刊予定）、1－45 頁。

〔学会発表〕（計１件）

②姜東局「近代朝鮮における国際秩序・国際法の理解」[21 世紀多極化・多文明世界における国際法秩序へのアジアの貢献]研究会での報告、明治大学大学会館第二会議室（東京都千代田区）、2010 年 7 月 19 日。

６．研究組織
(1)研究代表者
姜　東局（KANG Dongkook）
名古屋大学・大学院法学研究科・准教授
研究者番号：80402387
(2)研究分担者
なし
(3)連携研究者
なし